

令和四年 年頭のご挨拶



島村宜伸会長

新年おめでとございます。会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様にはご家族共々良いお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、旧年中は、本協議会の活動に多大のご協力、ご支援をいただき心からお礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、新型コロナウイルスCOVIT-19が一昨年に引き続き猛威を振るった一年でした。世

界で二億人以上の人々が罹患するとともに五百万人近くの死者が出ました。もとより日本も例外でなく感染された方が百七十万人を超え、亡くなった方も一万八千人を超えています。

当協議会の活動においても慰霊諸団体と同じく制約を受けることとなり、七月十日に斎行した靖國神社における本協議会と慰霊諸団体が合同で主催する「令和三年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、令和三年度と同様に参列者を首都圏所在の慰霊諸団体代表に限定せざるを得ませんでした。

しかしながら、参列できないのであればせめて在宅でも参拝したいとのご意向を寄せられた皆様も居られましたので、併せて百五十六名（在宅参拝者を含む）のご芳名を奉納できました。温かいお心をお寄せいただいた会員並

びに慰霊諸団体の皆様に厚くお礼申し上げます。

次に戦没者遺骨収容事業についても、「戦没者遺骨収集推進法」に基づき設立された「（一社）日本戦没者遺骨収集推進協会」（以下「推進協会」という）の活動が海外において活動を行うことができない状態となり異郷の地で帰国を待ちわびておられる一二万余の戦没者の一日も早い帰還に支障をきたすこととなりました。そのような制約下で硫黄島における遺骨収容事業は限定的なものとならざるを得なかったものの、2回の遺骨収容事業に当協議会会員団体から参加いただくことができました。

国際情勢を振り返りますと、米国はバイデン大統領を中心とする民主党政権が本格的に始動しました。中国・北



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第54号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 1-5-7

東専堂ビル2階

電話：03 (6380) 8943

FAX 03 (6380) 8952

<https://ireikyoku.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 圓 藤 春 喜

発行人 國 澤 輝 生

印刷所 島根印刷株式会社

目次

令和四年 年頭のご挨拶	1
ノモンハン事件	3
(一) 兵要地誌 第1次事件	8
硫黄島遺骨収集に参加して	16
事務局からの報告等	



靖國大絵馬は、愛知県名古屋伊勢絵馬協賛会安田識人氏から御祭神奉慰のため昭和五三年から奉納いただいているもので、横二・七六m、高さ二・一九mのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。

朝鮮等わが国の経済・安全保障に影響を及ぼすアジア地域においてどのような外交・安全保障政策を展開していくのが注目されるところです。

中国は、習近平独裁体制をますます強化するとともに、米国に対抗する姿勢を明確にし、CPTPP(包括的及び先進的な環太平洋パートナーシップ協定)への加入申請等によりアジア・太平洋地域での経済活動の活発化を図るとともに一帯一路構想に基づく東南アジア・欧州・中東地域を含む諸外国への経済支援の活発化、南シナ海軍事拠点の維持強化など、経済力・軍事力を背景とした拡張主義が益々顕著になっております。

朝鮮半島に関しては、トランプ政権下の米朝首脳会談以降、非核化プロセスについて具体化の動きがなく、更に北朝鮮は弾道ミサイルの発射実験を続ける等、朝鮮半島を巡る情勢は何ら変化していません。

国内においても頻発する自然災害や新型コロナウイルスの蔓延等で国民生活が多大な影響を受けた一年でもありました。

我が国自身、周辺情勢に惑わされず、

毅然とした自主独立の姿勢を堅持しつつ国民生活の安寧が今ほど求められている時期はないと考えます。

新しい年を迎え、先人の御霊に比べ平和で明るい世にするには倍旧の努力が必要な時代であるとの認識を新たに、昨年の旧懐とともに、本協議会の使命の重大性と寄せられる期待の大きさに改めて身の引き締まる思いがしております。

令和四年の協議会活動ですが、柱の一つであります「戦没者慰霊崇敬思想の普及」については、戦友・遺族の老齢化とともに、我々の先輩が大東亜戦争を戦った意義、その苦闘の歴史、加えて大東亜戦争が果たした歴史的役割を知らない世代が増えており、今年も引き続きこの世代に焦点を当て、啓蒙活動をして参りたいと思っております。

もう一つの柱であります「戦没者慰霊事業の継続」については、例年同様、慰霊諸団体と合同の形で、七月九日に靖國神社において「令和四年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を執り行いますので、ご協力ご支援をよろしくお願い致します。

また、戦没者遺骨収容事業について

は、推進協会の本格的活動が五年目を迎え、新型コロナウイルスの対象地域の蔓延状況にもありますが益々活動の充実させることが期待されます。当協議会は今後も遺骨収容の抜本的推進に鋭意力を注ぐとともに、遺骨収容事業に参加を希望される慰霊諸団体の会員の皆様のご要望にこたえるべく引き続き努力する所存ですので、諸団体におかれましてもご意見、ご要望をお聞かせ下さい。

旧年を回顧し、新年への思いを記しましたが、私自身これらを思い描きながら、心新たに年頭の靖國神社の神前に額づきたいと思っております。

本年も、ご協力ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

令和四年 元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

謹賀新年

公益財団法人 偕行社

会長	志摩 篤
相談役	富澤 暉
理事長	森 勉
副理事長	深山 明敏
副理事長	熊谷 猛
副理事長	白石 一郎
専務理事	奥村 快也
事務局長	山越 孝雄

公益財団法人 水交会

会長	赤星 慶治
副会長	佐賀 幾雄
理事長	杉本 正彦
副理事長	河野 克俊
専務理事	村川 豊
事務局長	長谷川 洋

航空自衛隊退職者団体つばさ会

会長	齊藤 治和
副会長	杉山 良行
副会長	片山 隆二
副会長	戸田 眞一郎
副会長	藤田 信之
副会長	谷井 修平
専務理事	古賀 久夫

ノモンハン事件

(一) 兵要地誌 第1次事件

岩田 司朗

はじめに

ノモンハン事件は本来、単なる国境紛争のひとつに過ぎないものであったが、日ソ両軍最初の本格的武力行使であるとともに、日本軍として初めて味わった大規模な近代戦であり、この観点からみれば本事件は、大東亜戦争の緒戦とみることもできよう。

事件が本格化した第2次事件（昭和14年6月下旬～8月末）のわずか2ヵ月内外の間におけるわが方の作戦経過をみると、作戦部隊の戦場集中、航空撃滅戦、地上の初動攻勢のための機動と包囲攻撃、ソ軍の野戦陣地に対する正面攻撃、攻撃から防御への転換と広正面防御など、変化に富んだ各種戦闘場面が次々と繰り広げられた。ことに最後の段階においては、急迫した戦況下で第一線部隊の惨烈な戦闘場面が生じ、また上級司令部の意志による第一線部隊の撤退が行われた。更には武力行使の発端、事件措置要領、停戦などの事態をめぐり、大本営と関東軍との間に、しばしば深刻機微な対立的空気が醸成され、この事件の一連の経過は、一つの戦争の縮図のような観を呈

している。

本事件をめぐることは、大東亜戦争終結後、その統帥の拙劣を批判する極めて多くの評論が輿論を風靡したが、第一線将兵の勇戦敢闘にはすさまじいものがあり、かつて日本軍の完敗と評された戦果も、近年ではソ連側の史料が明らかになるにともない、両者互角の戦いであったことが判明している。

本稿は、国威の発揚に命を捧げられた将兵の御霊に哀悼の誠を捧げ、改めて激戦の経過を追体験しようとするものである。

1 ノモンハン地方の国境

外蒙は、元来、清国の領土であったため、境界など不明の箇所が多く、紛争の頻発したハルハ（ハルハ）河一帯は当時遊牧の民が往来するに過ぎず、廟の祭りに人が集まる程度で、国境地帯の大部は、無住地帯同様の状態を呈していた。

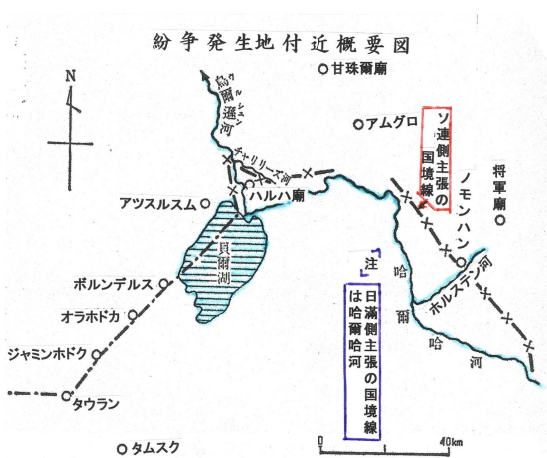
当時、日満側がハルハ河をもって国境としていたのに対し、外蒙及びソ連側は、清朝の雍成（ヨウセイ）12年（1734年）における巴爾虎（バルガ）、ハルハ河の勢力争いに対する清朝政府の裁断（付図のように境界線はハルハ河の北方に引かれている）を盾にとりその境界線は200余年後においても効力があるものと主張して譲らなかった。

この雍成境界は、国家間の条約に基

づくものではなく、当時の清国内部の辺境における一時的な行政区分に他ならないものであった。

因みに明治39年帝政ロシアのザバイカル軍測量隊の調製による、8万4千分の1の地形図には明らかにハルハ河に境界線が引かれており、また民國7年（大正7年）版民國參謀本部考察地形隊測図外蒙境界10万分の1図の国境線も同様である。

なお、第1次事件の際、師団から第一電が届いた時、関東軍司令部においては初め、ノモンハンの地点の図上標定に苦慮したといわれているが、これには疑問の余地が大きく、この地名は、古く日露戦争前、日本軍情報将校であった石光眞清大尉が使用した極めて小梯



公益社団法人 隊友会

会長	藤縄 祐爾
理事長	折木 良一
常務理事	増田 好平
常務理事	河野 克俊
常務理事	齊藤 治和
常務執行役	山下 裕貴
(総務担当)	
事務局長	藤井 貞文

一般社団法人 日本郷友連盟

会長	寺島 泰三
副会長	森 勉
専務理事	越智 通隆
常務理事	富田 稔
理事	袴田 忠夫

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長	杉山 蕃
理事長	藤田 幸生
副理事長	岩崎 茂
専務理事 兼 事務局長	石井 光政

尺の一般図にさえ、その地名が記載されているほどである。

2 戦場付近の兵要地誌

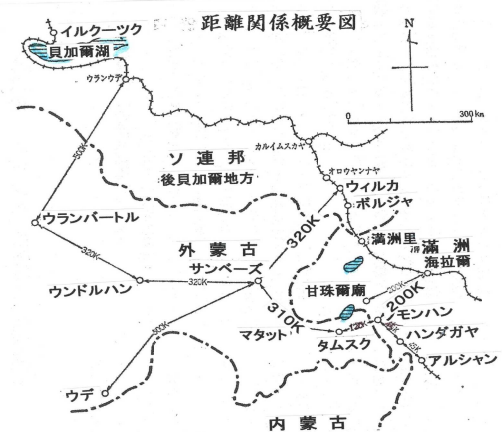
① 戦場に対する兵站的觀察

昭和11、12年ころまで日本陸軍を支配していた兵站常識は、集中及び兵力補充、作戦諸資材の補給輸送は、鉄道沿線の基地から200〜250 km内外の距離を限度とし、それ以上に及ぶ場合は、距離が伸びれば伸びるほど困難性が倍加し、特にその付近一帯が広漠不毛地であるときは、大兵力の使用は不可能に近いものとしていた。

しかし、昭和10、11年前後のころから、極東ソ軍の兵備が急速に増強され、特に飛行機、戦車及び機械化部隊の戦力が一層強化されたばかりでなく、それら技術面における進歩も目に見えて顕著となつてきており、わが参謀本部においては、ザバイカル地方（北西）及び外蒙古（西）の両正面からするソ軍の侵攻という問題に対し、改めて検討し直す必要に迫られていたのである。

ノモンハン事件の場合、戦場は日本軍の策源地たる海拉爾（ハイル）から約200km、ソ軍の策源地とみられていた満洲里支線の沿線ボルジャ又はウィルカ付近から約740kmであつた。

当時、参謀本部も関東軍もソ連の戦略機動力の実体にはまで考えが及ばず、従つてソ軍が、鉄道沿線の基地から大兵力を繰り出すことなどまず不可能で



あろうとし、戦場に集中する兵力も、外蒙軍のほかは、戦場からほど近い同国領内に駐屯する一部のソ連軍が増強される程度であらうとみていた。そしてこれに対し、わが方としては第23師団を主体とする兵力を使用すれば、それで十分作戦目的を達成できるものと判断したのである。しかしソ連側は、わが方の判断をはるかに上回る機動力を発揮し、優勢な攻勢兵力を戦場に集中し、膨大な作戦資材を輸送したのである。

② 地形の大観

戦場の地形は大波状を呈する草原を含む砂漠地帯で、いわゆる広漠不毛地であるが、雑草並びに低い灌木は至る所に生えていた。一般に自動車の行動は自由であったが、諸所砂の吹き溜ま



ホロンバイル平原を征く日本軍兵士 (Wikipedia)

りや砂丘があり、これらの場所では自動車
の行動が妨げられた。

見渡す限りの大波状地が天空に接し
早朝露営地を出発する時、夕刻に到着
すべき30数km前方の露営予定地を目前
に見ながら、行けども行けども近づけ
ないことは、殊に徒歩兵部隊にとつて
耐え難い苦痛であつた。また、広漠地
の常として、特徴のある地形地物に乏
しいことは、作戦間諸部隊をして、し
ばしば的確な地点の標定を誤らせたの
である。

③ ノモンハン戦場の特質

ノモンハン戦場において最も重大な問題は、哈爾哈河左岸の外蒙領一連の台地の標高が、右岸（満領）数kmに及ぶ地域よりも高かったことである。従つ

て当時日本軍の作戦した戦場から左岸の台地を望見しても、台端とわが方に対する斜面がわずかに見えただけで、台上にやや後退して布陣する砲兵を始め、その地区に行動するソ蒙軍の諸部隊の状況等はほとんど視認することができなかつた。これに反し左岸からは、右岸地域が数km、場所によつては十数kmにわたつて展望することができ、この地域に行動する日本軍は、そのほとんど全部がソ蒙軍の眼下に置かれ、攻め防いずれの時期においても、終始ソ蒙軍から正確熾烈な砲爆撃を受けたのである。

(4) 給水

戰場付近は降雨量が少なく、給水は重大な問題であつた。利用できる水源は哈爾哈河、ホルステン河、ホルステン河上流の「泉」であつたが、両河川はソ蒙軍の火制下にあり、利用は困難であつた。ことに8月下旬ソ軍の大攻勢が開始されてからは戦車、装甲部隊等が活発に行動し、同河谷に近く位置していた部隊でさえも、給水に、はなはだ事欠く状態にあつた。

(5) 気象

呼倫貝爾（ホロンバイル）地方は典型的な内陸気象である。5月下旬ころ昼間は相当の温度となるのに対し、夜間は冬服でもなお寒冷を覚えるほどである。7、8月ごろ、日中は直射日光が強く、堪え難いほどの酷熱（体感温

度は屢々摂氏30数度から40度に及ぶ)にあえぐとしても、夜になると気温が急に下がり安眠を妨げられるほどの冷氣(十数度以下)が襲ってくるのが普通である。そして8月末ころから寒さが急速に訪れ始め、10月から翌年4月までは概して氷点下に降下し、10月中旬になると零下十数度にまでなることがある。

このような気象が作戦に及ぼした影響は決して少なくなかったが、更に兵士を悩ませたのは、夏の夕刻以降、幕舎外において人馬に群りくる粉のような蚊群で、全く息をもつけぬ有様で将兵を悩ますところが大きであった。

また、広漠無住の砂漠地帯であるため軍馬の飼料はほとんど後方からの追送によらなければならず、利用できる野草は所により若干採取することができる程度であった。

3 関東軍の国境処理要綱

乾岔子島事件及び張鼓峯事件に際し、満州防衛の任に当たる関東軍においては国境紛争に関する処理の方針、要領が示されていなかった。そこで、第1課(作戦)辻政信参謀が、順序を経て上司に進言し「満ソ国境処理要綱」を起草、植田謙吉軍司令官がこれを決裁し、昭和14年4月25日、隷下兵団長等を新京に召致し示達した。

満ソ国境処理要綱の内容(骨子)は、次のとおりであり、軍は発令と同時に

これを参謀総長に報告した。

即ち、「軍は侵さず侵さしめざるを満州防衛根本の基調とする。このため満『ソ』国境における『ソ』軍(外蒙軍を含む)の不法行為に対しては周到なる準備の下に徹底的にこれを膺懲し、『ソ』軍を摺伏せしめその野望を初動において封殺破摧する」を方針とし、越境を認めた時は、これを急襲殲滅するため、一時的に『ソ』領に進出し、又は『ソ』兵を満領内に誘致滞留させてよい。国境線が明確でない地域においては、防衛司令官に於いて自主的に国境線を認定して、これを第一線部隊に明示すること。万一紛争が惹起したならば任務に基づき断固として積極果敢に行動し、必勝に万全を期すべきこと等をその要領で示している。

これは、国境紛争に当たっては、「侵さず、侵されず。紛争には不拡大を堅守」とする参謀本部の方針を逸脱するものであったが、報告を受けた参謀本部は、何等の措置も執らず放置された。

第1次事件

1 東搜索隊の出動

(1) 事件の発端と師団長の処置

ノモンハン方面では、事件発生前から屢々小紛争が起こっていたが、事件の直接の動機となった外蒙軍の最初の越境は、昭和14年5月11日であった。

これに対しわが方は、当時ノモンハン付近において警備に任じていた満軍をもって直ちにこれを撃退させたが、翌12日、外蒙軍は更に兵力を増加し再び越境してきた。

あたかも5月13日、海拉爾の第23師団司令部においては、4月下旬関東軍から示達された「国境紛争処理要綱」を師団長から隷下指揮下部隊各部隊長に対し徹底するための団隊長会同が実施されていた。その席上、この外蒙兵の越境が報告されてきた。

第23師団は、昭和13年に新編され、国境紛争に対応するため、関東軍へ派遣が決定されたものである。

第23師団長小松原道太郎中将は、紛争処理に関する関東軍司令官の意図を体し、直ちに越境した外蒙軍の撃破を決心し、搜索隊長東八百蔵中佐を指揮官とし、歩兵第64連隊第1大隊、搜索隊主力、満軍の一部を急派するよう命じた。

(2) 搜索隊の進出とソ蒙軍の撤退

満軍及び東支隊は5月13日午後、それぞれ海拉爾を出発してまず甘珠爾廟に進出し、状況を搜索したうえ、5月15日正午ころ東中佐は満軍を併せ指揮し、ノロ高地(ホルステン河下流南岸高地)付近に進出していた外蒙軍を捕捉撃滅するため攻撃を開始した。しかし外蒙軍はわが方の包囲を脱して、ハ爾哈河の左岸に退却した。

小松原師団長は以上の状況を承知するや、出動の目的を達成したものと認め、15日2200、東支隊長に対して満軍をノモンハン付近に残して警備させ、支隊を海拉爾に帰還させるよう命じた。支隊は17日までに原駐地に帰還し、事件はこれ以上拡大することはないと判断された。

2 ソ蒙軍の再越境

東支隊が海拉爾に引き揚げると、ソ蒙軍は再びハ爾哈河の右岸地区に進出してきた。5月19日、21日の間における飛行機の偵察、ソ軍の捕虜に対する調査、満軍の地上搜索等により、ハ爾哈河兩岸、特に左岸にはソ蒙軍多数が進出してきていることが判明した。飛行機の行動も活発となり20日には本事件最初の空中戦闘が行われた。

ここにおいて小松原師団長は、越境した当面のソ蒙軍を捕捉撃滅するに決し、5月21日午後、歩兵第64連隊長山縣武光大佐に対し、「搜索隊等を併せ指揮して山縣支隊となり、当面の外蒙軍を捕捉殲滅せよ」との攻撃命令を下達した。なお山縣支隊には、所要の満洲国軍が配属され、臨時飛行隊は支隊の戦闘に協力することとされた。

3 山縣支隊の戦闘準備

(1) 甘珠爾廟における戦闘準備

山縣支隊長は5月22日午後甘珠爾廟に到着し、ハ爾哈河とホルステン河との合流点(以下「川又」と略称)北東

側(バル西高地)と南東側(ノロ高地)両地区には、それぞれ約200名のソ蒙軍が進出し、また川又西側台地上には少なくとも砲2門と装甲自動車2、3両を確認した。なお航空関係者から、ソ軍の飛行機の動きが逐次活発となり、この日午前には延12機が満州領域の上空に侵入し、これに対しわが方もその都度出動して反撃を加え、損害を与えつつあることなどを承知した。

小松原師団長は26日、支隊本部に到り諸般の状況を聴取し敵情を視察した後、戦機が熟したものと判断、「28日払暁を期し越境ソ蒙軍を攻撃して哈爾哈河右岸地区に捕捉殲滅すべき」旨の要旨命令を下達して山縣支隊長に攻撃実行を命じ、同夜海拉爾に帰還した。

(2) 支隊の攻撃計画

山縣支隊長は、27日2100、東搜索隊長以下を集めて攻撃計画を提示した。同計画では「支隊は5月28日飛行団協力の下に『ノモンハン』付近に越境しある敵を急襲し、之を哈爾哈河右岸地区に捕捉殲滅する」を方針とするものであったが、その部隊運用は、川又北方渡河点(浅田小隊の目標)から東渡(第11中隊の目標)に至る正面26、27kmの地域に対し、歩兵5中隊(軽機関銃30、重機関銃10、歩兵砲2、連隊砲3、速射砲4)、搜索隊2中隊(軽機関銃13、重機関銃2、13mm機関銃5)及び装備不十分な満軍400内

外のみで攻撃を敢行しようとするものであった。これは当時の日本軍の部隊運用思想をよく示しており、その態勢は包圍攻撃を追求しているが、兵力を広域に分散しての全正面攻撃であり、形の上の包圍に捉われた感が深い。

4 搜索隊の勇戦苦闘

(1) 翼側から陣内への突進

搜索隊は、5月28日0230、ノモンハン西方約11kmの地点に集結した後、川又に向かって急進し、ソ蒙軍の抵抗を受けることなく、その左翼から内部に進入、0530には川又軍橋の東側1.7kmの砂丘に到着した。

東隊長は、バル西高地前方には戦車を有する有力なソ蒙軍が陣地を占領し、また哈爾哈河左岸外蒙領の台地上にも、少なからぬ戦車、砲兵、騎兵等が居ることを承知し、背後及び側面を警戒しつつ、西面する陣地を占領して退路を遮断し、かつ支隊主力の進出を待つて当面のソ蒙軍を撃滅するに決し、諸隊を配備につけた。

当面のソ蒙軍はその後逐次増加し、戦車を伴う一部の歩兵は間断なく攻撃を加えてきており、次いで0800頃からは対岸台地上に12榴級4門が出現し猛射を開始した。搜索隊の側背には、他正面から移動してきた有力な徒歩乗馬、車載の各種部隊が次々に現れ、それらが正面に布陣したソ蒙軍と呼応して包圍的に攻撃を開始した。東中佐

は、北方からの支隊主力の来着が近いことを確信しつつ、優勢なソ蒙軍との交戦を続けた。

しかし午後になっても、主力方面から一兵の来着もなく、また連隊砲、速射砲による一発の協力射撃もなかった。

東中佐は、搜索隊副官を支隊本部に派遣し、部隊の増援を要請したが、これは支隊本部に届けられなかった。

(2) 28日夜以降の防御戦闘

28日午後、支隊の尖兵が主力とはぐれて搜索隊に合し、また19時過ぎ、川又北部渡河点占領部隊である第4中隊の浅田小隊が合流した。

日没後(当時の日没は21時30分ごろ)間もない2210頃、ソ軍は軍橋前方の既設陣地から、探照灯3基をもつて

搜索隊の陣地を照射し、45mm級速射砲と迫撃砲によって猛射を続け、一方、戦車を有する徒歩部隊はわが左翼に迫ってきた。

東中佐は機先を制して両中隊をもつて突撃を敢行し、これを潰走させたが、我方も両中隊長はじめ将兵の死傷は少なかつた。

29日0230、東部隊長は状況を報告するとともに増援を要請したが、支隊主力の動きは不明のままであった。

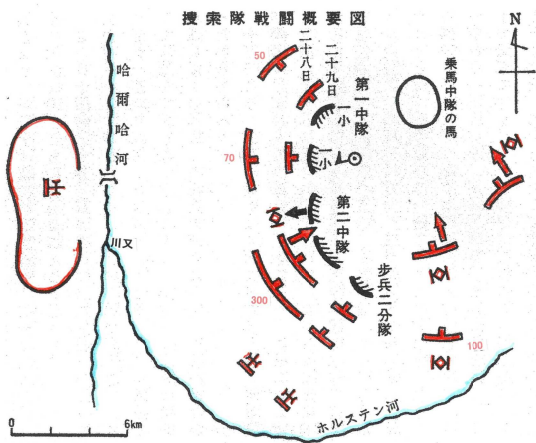
29日天明前、300、400に及ぶソ蒙軍は、重火器射撃とともに激しく攻撃、天明と共に、熾烈な砲撃を開始し、12榴、野砲、迫撃砲、速射砲などあらゆる種類の砲弾が、わが陣地に落下するに至った。

15時頃ソ蒙軍の戦車は陣地後方に侵入し、前面及び両翼の狙撃兵も陣前至近の距離に迫り、東隊長は最後の下士官伝令を支隊本部に派遣して状況を報告させた。

18時過ぎ、既に陣前約20mに近接したソ蒙軍第一線部隊に対し、東中佐以下20数名は勇躍突撃に移り、全員、「護国の神」と化した。28日夕以来、搜索隊と共に激闘を続けた浅田小隊も、東中佐の切なる後退希望にも拘らず、最後まで陣地を捨てず搜索隊と運命をともにした。

5 支隊主力の行動

(1) 支隊主力の前進



支隊主力は5月27日2100、甘珠爾廟を出発、28日早暁、737高地北西側に達した。川又に向かう途中、6時過ぎ731高地付近において初めて敵砲火の洗礼を受け、その後733高地付近のソ蒙軍の第一線陣地に接触し、彼我の間に銃火が交わされることとなった。

搜索隊からはこの日、1230頃と1430頃の2回にわたり、戦況報告と支隊の進出を促す意見具申が出されたが、支隊はソ蒙軍に相当の損害を与え、逐次後退させたものの、敵の砲撃に阻止され前進が困難となり、遂に搜索隊と分離したまま夜を迎えることになった。

29日天明とともに支隊主力正面のソ蒙軍は攻撃を開始し、我は防戦に迫われて攻撃前進ができず、遂に搜索隊の急に応じられなかった。

支隊長は、やむなく29日夜暗をもって攻撃する決心を採ったが、その実現はできなかった。

(2) 支隊一部の行動

支隊主力と離れて行動した立川隊は28日0630、攻撃を開始し755高地のソ蒙軍を撃壊したが、その後の戦況は一進一退であった。

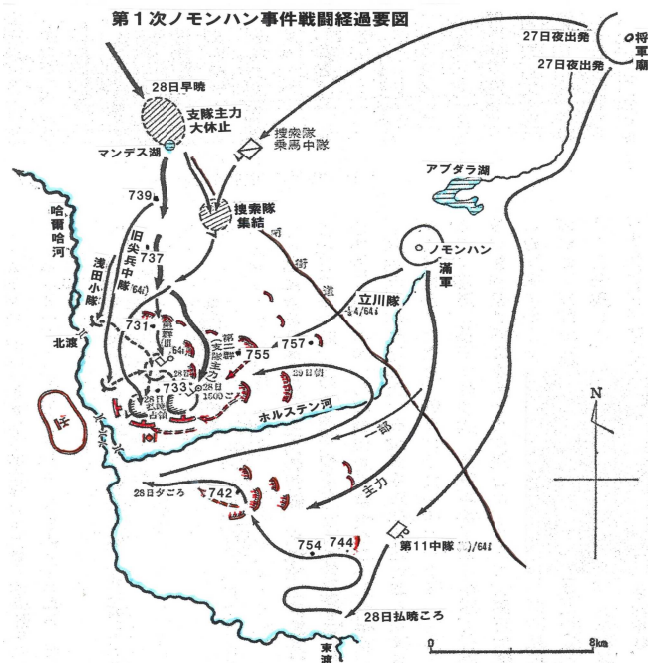
また第11中隊は28日0500頃所命の東渡に到着したが、付近にソ蒙軍の姿がなく、主力への復帰の命令を受け転進中、満軍と会し、相互協力してノ

口高地(・742)のソ蒙軍の小部隊を駆逐した。

搜索隊に対する弾薬補給は、28日20時支隊本部から補給班が派遣されたが、到着寸前ソ蒙軍に包囲され全滅した。続いて実施された第2次補給班の派遣も、ほとんど全員が戦死した。

(3) 5月30日の戦死者収容

師団長は、所望の成果が得られたものと信じ、28日夜諸隊を甘珠爾廟付近に集結の命令を下した。しかし戦況は厳しい状況にあることを承知し、改めて29日夕、歩兵1コ大隊を基幹とする部隊を増強するに決し、30日17時頃戦場に自動車輸送させた。



山縣支隊長は30日夕来着予定の増援部隊を合せ、夜襲により当面のソ蒙軍に痛撃を与えた後戦場を離脱するに決したが、実行は完全な防御態勢への移行であった。そのような折、戦場に來た辻参謀が支隊長以下を督励し、30日夜、ソ蒙軍の抵抗を予期しつつ夜襲の隊形及び要領をもつて敵中に前進し、搜索隊戦死将兵の遺体を収容した。案ぜられたソ蒙軍からの砲撃や戦車による妨害等はなく、搜索隊及び浅田小隊の将校以下大半の遺体を収容することができた。

(4) 支隊の撤退

師団長は全般の戦況を勘案し、31日朝、支隊撤収に関する命令を下達した。当時なお有力なソ蒙軍が右岸に残存し、また戦死者の遺体収容も完全に終わっていないだったので、支隊長は15時、夕刻に制圧射撃を加えると共に、大隊の一部をもつて攻撃を行い、諸隊の全力を挙げて遺体を収容するよう命じたが、これらの行動は不徹底のままに終わった。

この作戦に参加した山縣支隊2,082名に対し、ソ蒙軍は2,300名、砲に関しては、日本軍は射程の短い山砲、歩兵砲5門に対しソ蒙軍は自走砲を含め76mm砲12門、122mm榴弾砲4門、戦車に至っては日本軍0に対し、ソ蒙軍は13両と圧倒していたが、日本軍の戦死者159名、戦傷者119名、行方不明12名、計290名に対し、ソ蒙軍は戦死・行方不明171名、戦傷198名、計369名と、戦力に勝るソ蒙軍の損害が大きかった。

6 日ソ両軍最高司令部の統帥

当時の大本営参謀部はこの国境紛争について、情報を軽視し根拠のない直感でソ連側においても事件拡大の意図はないものと判断し、関東軍に対し、「その措置に干渉しない」ことを基本姿勢とした。即ち国境紛争不拡大方針を謳う大本営であったが、関東軍の今次作戦を抑制すべき断固とした処置を何ら執ることはなかった。

一方、モスクワのクレムリンでは、満蒙国境紛争が勃発したことを知ったスターリンは、東京に送り込んだスパイ・ゾルゲや現地からの情報に基づき、日本軍が本格的戦争に走る見込みが少なくないと判断した。そして来るべきドイツとの決戦を前に、後顧の憂いをなくするため日本軍に対し徹底的打撃を与えることに決し、当時赤軍で最も優秀と目されたジューコフ中將を戦場に送り込んだ。

(続く)

硫黄島遺骨収集に参加して

水交会 渡部 幹昭

1 はじめに

私が硫黄島戦没者遺骨収集派遣に参加したのは、定年退職後、戦没者及び殉職された自衛隊員の方々の慰霊を目的に、水交会月例参拝に毎回参加するうち、当時、水交会事務局長であった本多宏隆氏から「戦没者の慰霊顕彰に興味がありなら硫黄島の遺骨収集にも参加されてみては如何ですか。ただし、現在希望者が多く申し込み順で、実際に行くのは数年後になります」とのお声がけをいただいたのがきっかけであった。そして令和元年9月24日出発の硫黄島戦没者遺骨収集派遣への参加が決定したものの、私事で私縮であったが出発2日前に母の急逝により参加を断念、関係者の皆様に多大なるご迷惑をおかけしてしまった。

それから2年、令和3年度第2回硫黄島戦没者遺骨収集派遣への参加について打診をいただき、捲土重来を期して今回の参加となった。

本報告においては同派遣における作業概要及び所感等について記した。また、水交会からの同派遣への会員参加は、水交会から「公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」に対して推薦を行い同協議会から「一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会」へ

の上申により同推進協会が最終的に決定する手続となっている。

2 令和3年度第2回硫黄島戦没者遺骨収集派遣の概要等

(1) 派遣期間

10月3日～10月19日(17日間)

令和3年度第1回硫黄島戦没者遺骨収集派遣がコロナ禍のため中止となり実質的に今回が今年度初の派遣となった。また、これまで年度毎に収容した御遺骨は年度末に一括して厚生労働省に引き渡しを行っていたが、今年度から派遣毎に千鳥ヶ淵戦没者墓苑において厚生労働省への遺骨引渡式を実施することとなり日程が1日延びた。この措置により収容された御遺骨が一刻も早く内地に帰還できることは喜ばしいことであった。

(2) 編成

コロナ禍の影響で今回の収集派遣の規模は例年に比べ約半分程度の総員28名。内訳は「一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会」5名、「一般財団法人日本遺族会」3名、「硫黄島協会」4名、「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」4名及び「特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集団」「公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」

「特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会」「水戸二連隊ペリリュー島慰霊会」「公益社団法人隊友会」各

1名、「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」「重機オペレーター4名」「小笠原村役場」1名、「厚生労働省」2名の編成であった。このほか陸上自衛官4名が同行し、うち弾薬班2名は捜索中に発見された弾薬・爆発物等の危険物の空気測定、化学班2名は捜索する壕等の空気測定、安全確認、発見された化学物質等への対処がそれぞれ任務であった。

また、収集団とは宿泊施設が別の「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」4名「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」重機オペレーター4名、「小笠原村役場」1名を除く17名は2箇班に編成され、第1班は「日本戦没者遺骨収集推進協会」2名、「日本遺族会」1名、「硫黄島協会」2名及び「JYMA日本青年遺骨収集団」「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」「水戸二連隊ペリリュー島慰霊会」「隊友会」各1名の計9名、第2班は「日本戦没者遺骨収集推進協会」3名、「日本遺族会」2名、「硫黄島協会」2名、「国際ボランティア学生協会」1名の計8名であった。

(3) 作業概要等

以下時系列で作業概要等について記す。

・10月3日(日)・・・(結団式)

前泊場所である埼玉県西武新宿線新狭山駅所在の「新狭山ホテル」に集合

し、18時から同ホテル会議室において「結団式」を実施した。冒頭団長から収容作業については真摯な態度で作業に向き合ってもらいたい旨の挨拶があり、また、説明会においても同団長から熱中症予防対策、コロナ感染防止対策に万全を期すこと、本派遣では行事として懇親会を実施しないことの指示・伝達があった。その後各自簡単な自己紹介・質疑応答を行い終了した。

・10月4日(月)・・・(硫黄島へ出発・来島報告・捜索現場下見・荷物整理)

05:55 バスに乗りし航空自衛隊入間基地へ向けてホテルを出発、同基地到着後、硫黄島行き貨物輸送用パレットに各自の手荷物を預けた(事前に「日本戦没者遺骨収集推進協会」宛送付した荷物は既に同カテゴリーに搭載済)。

その後「入間基地ターミナル」待合室において搭乗手続(写真入り身分証明書提示して「認識票」を受領し身体に装着)を行い出発まで待機した。搭乗した輸送機は航空自衛隊最新鋭の「C-12」で機内は広く座席の座り心地は良好、トイレも完備しており年寄りの自分にとっては安心であった。

08:10 同基地を離陸、飛行時間は約1時間50分、気流もよく安定した飛行で座席が民間旅客機並みであれば民間機と何ら遜色のない乗り心地であった。

10:05 海上自衛隊硫黄島航空基地

に到着しタラップを降り立った瞬間、

天候は快晴であったが強い風と手に汗を掻く程「モア」とした湿気を帯びた空気が我々を迎えてくれた。降機後バスに分乗し宿舎であるBEQ（下士官用宿舎）に移動して荷物を受領し、各自割り当てられた部屋において荷物の整理、事前準備した昼食を喫食した。

宿舎はシングルベッド2台、1人用椅子・テーブル各1が配置され更衣ロッカー、洗面台完備の洋室で、トイレ・シャワーは隣室と共用という「軍の施設」としてはごく当たり前にシンプルかつ合理的になっていた。宿舎は24時間空調設備が稼働しており室内気温は概ね26度に保たれ、夕方洗濯したものは翌朝には乾いた。空調維持のため窓は開閉禁止、カーテンは空調設備誤作動防止のため常時閉めの状態であった。

なお、作業着等の洗濯物を干す洗濯ロープは、部屋入口の更衣ロッカー把手から窓際のカーテン留め具までの間に張ったものの、持参品が5メートルと短かったため予備のロープを繋ぎ約5.5メートルの長さで設置した。

全団員は来島報告のためバスに分乗し「硫黄島戦没者の碑」（天山慰霊碑）に移動、14時同碑に拝礼、英霊に対して来島し御遺骨収容作業を実施する旨報告した。また、靖国神社の御神酒を同碑前にお供えし英霊の安からんことを祈念した。その後今回捜索する現場

の壕周辺を下見して帰途に就いた。

15・20 約40分間全体ミーティングを宿舎2階の「ラウンジ」において実施、団長等から今回の捜索地域に関する説明、作業時の留意点、宿舎内における団体生活上の注意点（コロナ禍における集団生活では2人以上の飲酒の禁止、ごみ処理方法、掃除当番等）などの伝達を受けた後、遺骨鑑定専門員から御遺骨収容時の留意事項について詳細に説明があり、硫黄島において収容した御遺骨は令和2年4月1日から御遺族からのDNA鑑定申請を受け付け同鑑定を実施することとなったので収容時に複数の御遺骨が混合しないよう特に注意することと厳命された。

17・21（日没時刻） 「気をつけ」のラップ後、ラップ「君が代」の吹奏裡に国旗降下式が開始され自衛官ではない自分ではあるが思わず「気をつけ」の姿勢を取り国旗掲揚塔の方向に向かって注目した。ラップ「君が代」はいつ聞いても肅然として襟を正さしむる響きであった。この音色を硫黄島の英霊も朝な夕なに聞いておられると考えると昭和20年2月にタイムスリップした気持ちになった。

20・00 「巡検」のラップの調べが流れると切々たる思いが込み上げてきた。

・10月5日（火）…（作業初日）「234-IC-212」

（「1」内は作業実施場所の予め定まったグリッドの番号及び記号で以下同じ）ここで団員の1日の生活を紹介すると、05・40朝食に始まり22・00消灯という早寝早起きの生活であった。作業時間は午前3時間、午後2時間の1日5時間。作業時の休憩は、地熱が高い壕内や遮蔽物のない炎天下での作業を考慮し20分間の作業後10・15分間休憩という団員の健康・安全に配慮した体制が確立していた。

また午前の作業終了後、シャワーを浴びる時間を確保し昼食後は適度な休憩をとれるように工夫するなど合理的・効率的に組まれた日課表であった。

本日から捜索地域「234-IC-212」の遺骨収容作業にとりかかるが壕内作業となるためヘルメットにヘッドライトを装着しつなぎ作業服を着用した。

現場では作業開始前、全員で英霊が眠っておられる壕に対して拝礼を行った。これは午前・午後の作業開始時と終了時に必ず行われ最終日まで実施された。拝礼時は、英霊が安らかに眠られること、御遺骨が1柱でも多く収容され内地に帰還し御遺族のもとに帰られることを祈念しつつ拝礼した。

「234-IC-212」は、壕内に既に御遺骨が確認されており、午前は収容場所に至る通路の壕底（壕

の本来の床面）上に堆積した土砂を御遺骨の有無を確認しながら箕に入れて壕外に搬出する作業を行い、御遺骨が含まれている場合は箕の中の土砂をフルイにかけて収容する作業を実施した。土砂の中からは、菓のガラス製アンブル、瓶、カンテラとともに手榴弾2発が発見され弾薬班が対処した。午後も同様の作業が続く、作業班が2箇班編成であることから1箇班が20分間作業を行っている間もう1箇班は15分間休憩を取り、これを交互に繰り返して効率的に作業を実施した。

現場は壕入口から5メートル進むと8段の階段になり、その下の踊り場状



遺骨収容作業風景（その1）

になつてゐる場所から壕底を出す作業を実施し、自分も作業の進行に伴い諸先輩に交じつて先頭の壕底を出す作業に四つん這いになつて従事したが、土砂を掘り下げた際膝のプロテクターや手袋を通して体温よりかなり高い地熱が伝わつて来た。壕内の温度が高いために息も苦しくなるなど作業環境は厳しいものであつたが、この先に英霊が眠つていらつしやうと思うと居ても立つても居られない気持ちで作業を続行した。

・10月6日(水)・・・(作業2日目)・
「2341C1212」

午前は昨日に続いて「2341C1212」を搜索し階段下から御遺骨を収容したが骨片が多く大きな御遺骨は発見されなかつた。午後も同所において収容作業を行い1柱分と思われる大腿骨、踵や足の指の御遺骨を収容した。自分も壕内作業場所最先端において刷毛や竹べら・移植こてを使用し収容作業を行つた。

今を去る数十年前、学生時代の夏休みに栃木県小山市所在の乙女不動原遺跡の発掘調査に1箇月ほど従事した時の遺骨に比し、戦後76年間、硫黄島において高温の地熱に晒されながら地中に眠つておられた御遺骨は脆く収容作業の難しさを痛感した。

この日収容した御遺骨は作業終了後白い御遺骨袋に納められ、建制順に指名された団員が作業現場において団長

から拝受し、団長を先頭に捧持者(御遺骨を宿舍まで捧持して運ぶ者)が続き、そのあとを団員が1列になつてバスまで移動、バスには団長とともに御遺骨を捧持したままの捧持者が乗車し、宿舍到着後も同様に1列で宿舍2階の「安置室」に移動、団員全員が見守る中、国旗前の白布で覆つた安置台に団長が安置した。

捧持者は作業現場から安置室に到着するまで終始無言を厳守していた。その後御遺骨に対して全員で拝礼し解散となつた。

搜索現場から安置室まで御遺骨袋を捧持者が捧持して安置する儀式は、この日以降ほぼ連日にわたつて行われた。早速持参した靖国神社の御神酒を安置室の安置台にお供えし拝礼した。

17・50 全体ミーティングでは遺骨鑑定専門員から搜索現場において暫定1柱の御遺骨を収容したこと、弾薬班から手榴弾3発を発見したことがそれぞれ報告された。

・10月7日(木)・・・(作業3日目)・
「2341C1212」

午前は昨日同様「2341C1212」の収容作業を実施した。壕内から搬出される土砂のフルイ作業では多くの骨片を収容した。また、土砂の中から女性用のペンダント様懷中時計の遺留品が発見され素人目にも当時としては高価な品ではなかつたのかと思われ

た。一緒にフルイ作業をしていた「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」会員の話では、時計の遺留品はよく発見され、将校は男性用時計が、下士官兵は女性用の時計がそれぞれ多いとのことであつた。妻や母や姉妹が無事に帰つて来てくれとの思いを込めて手渡した品であるうと考えると思わず目頭が熱くなつた。

後日この懷中時計について「日本戦没者遺骨収集推進協会」職員が調査したところカバー付きの懷中時計と判明、外側はカバーで内側に時計本体及び竜頭があつたと伝達されたが所有者特定に至る証拠はなかつた。同職員によれば遺留品から氏名等所有者特定につながる証拠が得られない場合は壕内に戻



壕内土砂の中から見つかった懷中時計

すとのことであつた。

午後の作業では遺留品として認識票も発見された。御遺骨の所属部隊・個人の特定につながるかもしれないと思われた。全体ミーティングでは遺骨鑑定専門員から遺骨鑑定状況について説明があり、収容した複数の御遺骨の足の大きさが違うこと、膝のお皿の骨も3枚収容したこと、御遺骨は2柱であるとの報告があつた。

22・40頃 足がつつて目が覚めたが丁度そのころ東京都では震度5強の地震が発生していた。海上自衛隊硫黄島基地隊の隊内放送によつて地震発生を瞬時に知ることができ留守家族と連絡を取り無事を確認できた。さすが精強・即応・変化への適合の海上自衛隊であると感じ・感謝した。

・10月8日(金)・・・(作業4日目)・
「2341C1212」「23331J124127・32」

午前は「2341C1212」壕内の収容作業を継続した。作業開始前、作業4日目で御遺骨2柱収容の実情に鑑み、遺骨鑑定の見地から遺骨収容を慎重に行う結果、作業時間がかかりすぎることに苛立ちと件数主義的な要求があることの狭間に立ち苦悩していると思われる団長から、作業効率の向上についての檄が飛んだ。

午後からは分遣隊を編成(「日本戦没者遺骨収集推進協会」・「日本遺族

会」、「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」、「水戸二連隊ベリリユー島慰霊会」、「隊友会」、「小笠原村役場」

「弾薬班」、「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」各1名、同重機オペレーター2名の計10名)し「233-J-24」

27・32」のポケット(壕内等に作った人が1人入れる程の空間)5箇所のうち3箇所(「233-J-26・27・32」)

を捜索したが遺留品として米軍が残っていたと思われるコーラの瓶などが出てきただけであった。

本日で団員が団体生活を開始して6日経ったが、各自が年齢、性別、所属団体、参加回数などの枠にとらわれず、御遺骨を1柱でも多く収容し御帰還させるという一つの目標に向かって一生懸命に取り組んでいる姿や一体感を素晴らしいと感じるまでになった。全体ミーティングでは遺骨鑑定専門員から「234-C-212」の御遺骨は計4柱になるとの報告があった。

・10月9日(土)・・・(作業5日目)・「233-J-24・25」

午前には搜索現場における拝礼後、团长から作業効率を最優先にして取り組む趣旨の発言が昨日に続き再度あった。

分遣隊は「233-J-24・25」に移動して残り2箇所のポケットを搜索、24号ポケットからは何も発見されなかったが、25号ポケットからは2柱分と思われる御遺骨の一部が収容されると

もに鉄カブト1個、銃剣1本、小火器弾薬33発が発見された。午後同ポケットから土砂を搬出してフルイ作業を実施し御遺骨の収容作業を行った。

作業終了後同ポケットから収容した御遺骨は御遺骨袋に納められ班長から自分が拝受して捧持し、本隊と合流後御遺骨捧持の手順に従い安置室に安置した。自分は御遺骨を捧持したのは初めての経験で胸が熱くなった。

・10月10日(日)・・・(休養日)本日は最初で最後の休養日であった。午前・午後ともに2名以上の団体行動であれば外出可能でその際は「外出簿」に必要事項を記載の上、摺鉢山・慰霊碑の巡拝など思い思いに過ごすことができた。

09・40から一定時間、海上自衛隊厚生館において日用品・嗜好品・水等を購入することも可能であり、価格は内地と比べてもあまり変わらず良心的なものであった。また、硫黄島滞在中の1日3食の食事は同島において諸作業に従事する鹿島建設の社員食堂「鹿島食堂」において日課表にある指定時間に全員団体行動で喫食することになっており、日曜日の朝食は唯一のパン食メニューでスープ、ウインナー、目玉焼きの総菜と一緒にゆつくりと頂いた。

また、海上自衛隊では金曜日がカレーライスの日であるのとは若干違い日曜日の昼食が毎週カレーライスとなっていた。

いた。「鹿島食堂」は3名という少ない調理員で運営しているが、業務用大袋の既製品のおかずは遠隔地ということでやむを得ないものの、手作りの総菜の味は良く野菜たっぷりで調理員の真心が伝わってくるものであった。

なお、「鹿島食堂」においても平日の夕食時間帯に同食堂横の売店で酒類等を販売していた。

・10月11日(月)・・・(作業6日目)・「233-J-25」

午前は先週同様25号ポケットの収容作業を実施し比較的大きい御遺骨を確認した。同ポケットにおいても壕底を出すために土砂を掘り下げると高い地熱を帯びた土砂が出てくるなど火山島であることを再認識させられた。

御遺骨の足首の部分と思われる位置には大きな岩が崩落しておりその岩を除去して収容した時は数十年ぶりに楽になられたのではないかと安堵した。

午後引き続き同ポケットの収容作業を実施したが、ポケット左側にはいつ崩落してもおかしくない巨岩があり危険と隣り合わせの中での作業であった。ここで壕内における御遺骨収容手順について簡単に説明する。①壕の掘削当初の床面部分、いわゆる壕底を明らかにするため堆積等している土砂を除去する

②壕底が明らかになったら壕先端部分に向け壕底に沿って土砂を搬出する

③同作業で除去した土砂の中に御遺骨を発見した場合はその土砂をフルイにかけて御遺骨を収容するとともに壕底を確認しながら慎重に更なる御遺骨の発見に努める

④御遺骨の収容に当たっては御遺骨1柱づつを収容し他の御遺骨と絶対に混ざらないように作業を実施する

何故壕底を確認しながら作業をすることが重要かというと壕底より深い地中に御遺骨は存在せず御遺骨の見落とし等を防止するためであった。

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

中に御遺骨を収容した場合はその土砂をフルイにかけて御遺骨を収容するとともに壕底を確認しながら慎重に更なる御遺骨の発見に努める

④御遺骨の収容に当たっては御遺骨1柱づつを収容し他の御遺骨と絶対に混ざらないように作業を実施する

何故壕底を確認しながら作業をすることが重要かというと壕底より深い地中に御遺骨は存在せず御遺骨の見落とし等を防止するためであった。

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

全体ミーティングでは本隊は「234-C-212」から御遺骨4柱を収容し搜索作業が概了した旨の報告があり明日からは「183-W-1」の搜

索作業に着手することであった。化学班からは「234-C-212」の壕内においてツルハシやスコップの開削跡に白カビ様の物質が大量に付着していたが、これは硫黄分を含む強アルカリ性物質で素手で直接触れるとねばねばしており指紋を溶かすほどの力がある。目に入ると激痛を引き起こすので十分注意されたいとの伝達があった。

・10月12日(火)・・(作業7日目)・

「233-J-25」「183-W-1」午前は25号ポケットの収容作業を実施した結果、御遺骨の収容、壕底の確認を実施して作業は概了し御遺骨1柱は自分が捧持して安置室に安置した。

結果として「233-J-25」からは2柱の御遺骨を収容した。その後分遣隊は「183-W」に転進して本隊と合流、同地域において作業を開始し午前の作業は09:40で終了した。

10:30から海上自衛隊厚生館において実施された土産物品販売において各自硫黄島来島記念としてTシャツ、ワッペン、洋菓子等の土産物品を購入した。午後からは作業が概了した「234-C-212」「233-J-24」「27・32」を全員で拝礼するとともに作業結果の確認を行った。また「183-W-1」からは御遺骨3柱を収容した。

全体ミーティングではこれまでに9柱の御遺骨を収容したこと、氏名判明

等の手掛かりとなる遺留品として認識票5枚(「212」4枚、「233-J」1枚)を発見したことがそれぞれ報告された。弾薬班からは「183-W-1」の様な海岸の砂浜では(土質が柔らかいため)不発弾などが埋まっているかわからない。例えば黄燐弾は煙が出たらすぐに土をかける、米軍のパイナップル式手榴弾は触らずそれぞれ速やかに弾薬班に連絡することとの伝達があった。

・10月13日(水)・・(作業8日目)・

「183-W-1・2」

午前「183-W-1」において土砂のフルイ作業を実施、最終的に御遺骨収容を確認して作業を終了し概了となった。

午後は「183-W-2」に移動して山積みされた土砂と隣接する崖の土砂を箕で運びフルイにかける作業を実施しそれぞれから御遺骨を収容した。

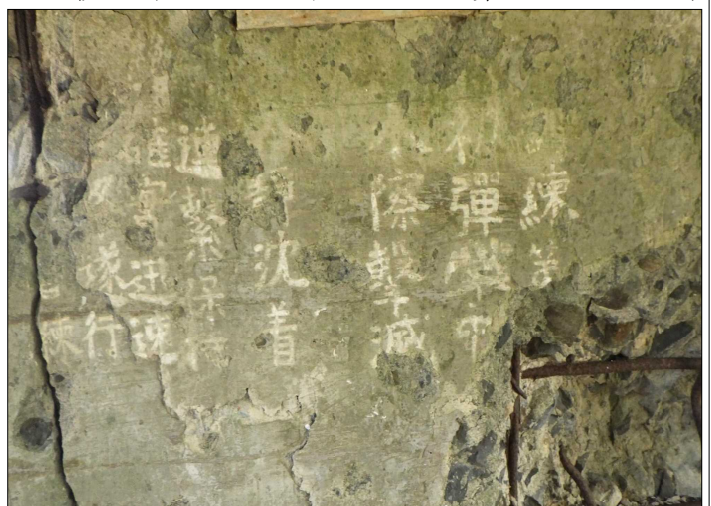
本派遣期間中は天候に恵まれていたが、この日初めてスクールに見舞われ車両もしくはテントに退避した。自分はずぶ濡れとなったものの作業終了時には半乾きの状態にまでなった。南の島の日差しの強さについて身をもって体験した。

作業間の休憩中、搜索現場南方にある「海軍南砲台」を他の団員数名とともに見学に行った。拝礼して中に入ると激しい攻撃を受けたため砲の台座

しか残っていないかった。そして弾痕がおびただしく無数のひびが入り一部が剥落したトーチカ内部左側面のコンクリート壁面に白色で書かれた「訓練第〇」「初弾必中」「水際撃滅」「冷静沈着」「連繫保持」「確実迅速」「〇〇遂行」「〇〇〇練」の文字が目飛び込んできた。

この言葉を書き記した海軍軍人の身命を賭して幾多の戦闘を乗り越え感得したであろう真理を伝える言葉の迫力を強烈に感じるとともに、同人の書き記した何時如何なる場合も基本に忠実に事に当たるこの言葉の一つ一つの真理は戦場における海軍軍人の根幹ではないかと思料した。今を生きる者として耳ざわりの良いスローガンが単なる言葉としてではやされる傾向のある現代、その言葉の持つ本質とは何かを常に考えなければならぬと改めて教えられた。作業終了後、収容した御遺骨を捧持して帰投し安置室に安置した。全体ミーティングでは「183-W-1」において収容した御遺骨は1柱、これで収容した御遺骨が計10柱となった旨報告があった。

また、「233-J-25」の御遺骨下から発見した遺留品の認識票は、調査の結果久留米編制の独立混成第2旅団中迫第2大隊第2中隊所属の軍人の



海軍南砲台壁面に書かれた文字

ものであることが判明したこと、弾薬班からは手榴弾2発、小火器弾薬61発を発見したことがそれぞれ報告された。

・10月14日(木)・・(作業9日目)・

「183-W-2・3」

午前は前日に引き続き「183-W-2」の搜索作業を実施、「司」ホソガヤ」と蓋に手彫りで刻印された石鹼箱(セルロイド製)を遺留品として発見した。午前中をもつて同地域の搜索作業は概了となった。

午後は「183-W-3」の搜索作業を実施した。同現場での作業はかつて重機によって積み上げた土砂の山を

崩しながらフルイ作業を実施し御遺骨の収容にあたるものであったが若干の骨片を収容して継続案件となった。

全体ミーティングでは千鳥ヶ淵戦没者墓苑において実施される厚生労働省への御遺骨引渡式の際の御遺骨箱は最終的に10箱となることが伝達された。

・10月15日(金)・・(土工具類等の洗浄・格納作業)

07..02 作業出発のため集合するもスコールにより待機となった。

07..35 宿舎を出発したが断続的な降雨のため現地における作業は困難と判断され午後から実施する土工具類洗浄・格納作業準備のため、搜索現場において使用した箕・フルイ・スコップ・鋤簾等の全土工具類を現場から撤収して宿舎へ運搬し午前の作業は終了した。

08..30 から待機となったため各自荷物整理を行った。

13..20 団員は宿舎裏に洗浄作業で濡れてもよい格好で集合し土工具類、ビニールシート等これまでの作業で使った備品類を全て洗浄・天日干しし15..00からはこれらを倉庫に格納して15..30作業は終了した。本日をもって搜索作業は終了となった。

全体ミーティングでは今後の現地追悼式、慰霊巡拝、自衛隊による御遺骨見送り式、御遺骨捧持者の指名等の説明・伝達が行われた。

・10月16日(土)・・(現地追悼式・慰

霊巡拝

現地追悼式は09..40安置室前に正装にて全員集合ののちバスに分乗して式場である硫黄島戦没者の碑(天山慰霊碑)へ移動、10..30から海上自衛隊硫黄島基地隊司令、航空自衛隊硫黄島基地隊副司令出席の下挙行された。

式は黙禱ののち追悼の辞を団長及び遺族代表(「日本遺族会」)が読み上げ、最後に全員が献花を行って10..50終了した。

慰霊巡拝は事前に希望場所等を団体に毎に聴取の上決定され2箇班に分かれて実施された。

自分の所属班は、車上からの拝礼等を含めて18箇所を慰霊巡拝した。順路は時計回りで宿舎から摺鉢山方面に向かい島の沿岸部を進みほぼ島を1周した後、最後は連日通いなれた「2341C」「2331J」の搜索地域から宿舎へと戻る経路であった。

①鎮魂の丘..綺麗に整備されブーゲンビリアの花が美しく咲いていた ②米軍将兵の碑 ③再会記念碑..米軍が上陸した南海岸を左手に見ながら進み車上から拝礼 ④海軍水平砲台..踏み分け道の坂を上るとすぐに到着し砲台周辺はよく整備されていた 昭和20年2月16日硫黄島防衛戦はここから始まったと言われている場所に立ち往時をしのび感慨無量であった ⑤南観音..観音像等を拝礼 ⑥航空機利用のトー

チカ..航空機の機体を利用したトーチカを見学した 同トーチカは周回道路から50..60メートル位背丈程もある草が生い茂った道なき道を進んだ先にあり、機体を外側から分厚い鉄筋コンクリートで固めた強固なものであった

⑦鶯地獄..噴気孔 ⑧米軍沈船跡 ⑨釜岩..奇石群 ⑩硫黄島島民平和祈念墓地公園..下車見学 鎮魂の丘から同公園に至る道路は未舗装かつ悪路で車の動揺が激しく、特に釜岩から同公園の間は隆起した海岸の真ん中にある砂州上の道路をスタックしないように運転するのが大変そうであった 因みに平成26年国土地理院の調査によつて

それまで小笠原諸島最大の島は父島であったが隆起の激しい硫黄島が同島を抜き一番になった ⑪医务科壕..壕内に照明設備が設置 ⑫海軍司令部壕..入口が2箇所あったものの岩が崩れ落ちて両方ともほとんど塞がれており入口付近で御霊安かれと拝礼 ⑬硫黄島神社跡..鳥居が建てられ御社も建立されていた 硫黄島に所在する自衛隊有志の方々が維持・管理されていると聞いた ⑭硫黄ヶ丘..これまでの亜熱帯気候の緑豊かな景色とは一変して噴気孔から蒸気が噴出しあたり一面硫黄で覆われまさに火山の景色そのものであった ⑮天山壕..午前に追悼式典が行われた硫黄島戦没者の碑に赴きその直下にある同壕を拝礼 ⑯北観音..天山壕

北側に位置し拝礼して硫黄島をほぼ1周した ⑰海兵隊壁画..「2341C」「2331J」近傍にあり米軍軍人が制作 ⑱米軍戦車残骸を見学し15..50宿舎に帰投した。

・10月17日(日)・・(自衛隊による御遺骨見送り式リハーサル・部屋の清掃・荷物整理)

07..20から07..50まで自衛隊による御遺骨見送り式リハーサルを実施、その後各自荷物の荷造り・部屋及びトイレ・シャワー等の清掃を行って11..00から点検を受け明日の離島に備えた。

・10月18日(月)・・(自衛隊による御遺骨見送り式・離島・入間基地における儀仗)

08..50までに各自全ての荷物(手荷物も含む)を宿舎玄関前に搬出、09..00入間基地行き貨物輸送用パレットに搭載した。各自の全荷物をここで積み込む理由は、御遺骨の捧持者は御遺骨だけを捧持するため所持する荷物は身分証明書、スマートフォン、財布等、内地到着後必要最小限かつ正装した服に収納できる物品しか携行できないためであり捧持者以外の団員も同様であった。

いよいよ硫黄島を去る時が来た。宿舎の2階階段ベランダに一人佇み摺鉢山それに続く米軍が上陸した南海岸を遠望しつつ、「海ゆかば」「ラバウル海軍航空隊」の1番・4番を歌いこの



現地海上自衛隊・航空自衛隊隊員による見送り

地に残る御霊安からんことを祈念したが万感胸に迫るものがあつた。

12・15 団長以下10柱の御遺骨を捧持した団員等が海上自衛隊差し回しのバス2台に分乗して「硫黄島基地ターミナル」に向かい到着後乗継手続を行った。

13・10 「海ゆかば」の流れる中、海上自衛隊硫黄島基地隊司令、航空自衛隊硫黄島基地隊副司令以下手空き総員の御遺骨見送りを受け輸送機「C-130」に乗り込み硫黄島を出発した。約2時間50分の飛行ののち16・05航空自衛隊入間基地に到着、飛行場エプロンには航空自衛隊儀仗隊が整列していた。降機後、団長を先頭に御遺骨を

捧持して1列で進み同儀仗隊に正対してラッパ「悲しみの譜」の流れる中、御遺骨が儀仗を受けた。

「入間ターミナル」にて小憩ののち17・00同基地を出発し関越自動車道・首都高速5号線経由で18・40宿舎であるKKRホテル東京に到着して同ホテル「平安の間」に御遺骨を安置・拝礼し本日の任務を終了した。

・10月19日(火)・(硫黄島戦没者遺骨引渡式・解団式)

09・30 御遺骨安置場所に全員集合し拝礼の後、御遺骨を捧持しバスに乗車して同ホテルを出発、一路千鳥ヶ淵戦没者墓苑に向かった。折から雨模様、天気であつたが10・30同墓苑に到着、降車後山本厚生労働副大臣及び来賓等が御遺骨を出迎える中、団長を先頭に御遺骨捧持者、その他の団員の順に同墓苑納骨堂前に設置された「硫黄島戦没者遺骨引渡式」式場の遺骨引渡台に向かつて進み、捧持者は2人づつ御遺骨を遺骨引渡台上に安置し拝礼、これを厚生労働省職員が拝礼して拝受し安置台に安置した。

次に全員で御遺骨に対し拝礼して、山本厚生労働副大臣以下来賓が献花を行いその後同省職員が御遺骨を捧持してバスに乗車し厚生労働省に向かった。10・50 引き続き解団式が同副大臣出席の下行われ、団長から帰還報告、同副大臣の挨拶、最後に団長から解団

のことがあつた。これをもつて令和3年度第2回硫黄島戦没者遺骨収集派遣の任務は全て完了した。

3 所感

今回の硫黄島戦没者遺骨収集派遣に関して自分が感じた点について2点述べたい。

第一点は「硫黄島の御遺骨収集にあつた何年を要するのか」、第二点は「硫黄島における戦没者遺骨収集時の遺留品の取り扱いについて」である。

第一点の「硫黄島の御遺骨収集にあつた何年を要するのか」については、厚生労働省ホームページ「地域別戦没者遺骨収容概見図」(令和3年9月末現在)によれば硫黄島における戦没者概数21,900名、収容遺骨概数10,520名、未収容遺骨概数11,380名と記載されていた。また、同省ホームページ「硫黄島における遺骨収集等の現状」(平成29年3月31日現在)によれば平成16年から同28年までの13年間に御遺骨1,978柱が収容され、

だことを出発点とする厚生労働省の所管業務としての遺骨収集は、この一点からしても終戦以来76年以上経過した現在、その組織力、効率性、妥当性等を再考し抜本的に改革する時期に来ていると痛感した。

第二点の「硫黄島における戦没者遺骨収集時の遺留品の取り扱いについて」は、10月14日の全体ミーティングの際、厚生労働省と「日本戦没者遺骨収集推進協会」の職員の間で議論があつた。

それは御遺骨収容場所から氏名等記載された遺留品(今回は認識票等)が何点か発見されたがその持ち帰りに関してであつた。

遺骨収容作業の実質的作業要領である同省作成の「別添 七つの心得・手順書等(硫黄島)」(令和2年9月10日現在)「(全団員に事前配布され必読指定)には「9 遺留品の取扱い」の項目に「(1) 遺留品は、所有者を特定する手掛かりとなる氏名等が記されているものに限り収容し、持ち帰ることを原則とする」と記載があり、これを根拠に持ち帰りを主張する「日本戦没者遺骨収集推進協会」に対し、厚生労働省は同手順書については、海外における収集を対象としており同資料には記載されていないが硫黄島はその例外で遺留品については現物ではなく写真を持ち帰り現物は硫黄島で保管することとしているとの主張であつた。

全戦没者遺骨収集地域から持ち帰った遺留品については、厚生労働省庁舎内にある遺留品保管倉庫の収容容積は限りがあること、海外から持ち帰った遺留品の数量は膨大なものになることなどを勘案すると、その保管・管理については運用上硫黄島は例外とするとという解釈にならざるを得ないのかもしれない。

今回発見した5枚の認識票は硫黄島現地において洗浄作業を行った結果、幸いにして記載事項について判読できたとのことであった。しかし、関係者からはこれまで現地において判読できなかった認識票もまた多くあったと聞いた。

そこでこれまで硫黄島から持ち帰らなかった認識票を完全に判読し御遺骨の身元特定につなげるためにはどのような方法を用いれば可能なのか知人の表面工学系の科学者に照会したところ「錆は金属性の素材表面が大気中の酸素と結合して生成した「膜」でありこの膜の最表層は総じて面粗度（表面の粗さ）が高くなり光の反射を妨げるため人間の目で読み取る際には非常に読みづらくなってしまう原因となる¹⁾。そこで錆を落とす（酸化層の除膜）ことで判読可能な状態となる。旧軍の認識票の大半は真鍮製²⁾であり茶褐色に変色していることで判読を阻害していると推測される。また、認識票の最表

層と刻印された文字等の形状に沿った酸化層が形成されていると推測できる。よって硫黄島現地で実施可能な錆の除去方法は重曹またはクエン酸による拭き取りあるいは漬け置き洗浄が適切である。さらに重曹・クエン酸は食品添加物であり毒劇物ではないことから世界中において広く使用可能で安全に復元できる方法である。

しかし、より正確な判読には「3次元レーザー顕微鏡」や「X線透過」による方法が提案される。「3次元レーザー顕微鏡」はレーザー光でスキャニングし形状を計測して画像ソフトにより視覚化することが可能な技術である。「X線透過」は非破壊検査等に広汎に用いられている技法で明瞭な判読が可能となると考えられる。何れの方法も分析技術としてはごく一般的な方法であるため精度が高く安価にできる方法と言える。」との回答があった。「3次元レーザー顕微鏡」や「X線透過」といった高度な科学機材を駆使できる環境にない硫黄島においては洗浄以外の高度な判読作業は不可能である。

今回は認識票を例に挙げたが、種々の遺留品であっても科学技術の進歩が著しい今日、高度な科学技術を活用・駆使した様々な方法により遺留品の判読を行い収容した御遺骨の身元解明につなげることができると考える。従って厚生労働省作成の「別添 七

つの心得・手順書等（硫黄島）」（令和2年9月10日現在³⁾）の中の「御遺族への御遺骨の返還に向けた戦没者の遺骨収集における七つの心得」の基本理念として「1 遠い異郷の地に眠る戦没者や御遺骨の帰還を長年待つ御遺族の心情に寄り添い、責任と使命感を持って遺骨収集に臨むこと」と謳っている以上、判読作業の高精度化を図るため御遺骨の身元解明につながる遺留品については同手順書「9 遺留品の取扱い」の項目の記載に従い御遺骨とともに遺留品を持ち帰り、現物によってあらゆる方法を活用して判読作業を実施し御遺骨の身元解明を行うことは必然であると思料した。

4 やいじ

初めての参加で御遺骨の捧持という大役を仰せつかったが、自分が捧持させていただいた御遺骨は記号・番号で甚だ申し訳ないことではあるが「R3-12-233-J-25-①」であった。

実はこの御遺骨は10月9日自分も収容作業に携わり、また収容した御遺骨を納めた御遺骨袋を搜索現場から現地安置室まで初めて捧持させていただいた。

そのようなことから捧持しながらこの御遺骨の英霊はどのような方であったのか、戦死された状況、御遺族はどうされているのかなど様々なことに思いを巡らせるとともに、内地に御帰還

された後DNA鑑定等のあらゆる手段を駆使してどうか1日も早く御遺族のもとに帰ることができまじうにとせつに願った。今回、硫黄島戦没者遺骨収集派遣において収容された10柱の御遺骨に対して、また、今なお硫黄島に眠られる英霊に対して、御霊の安からんことを祈念し、数十年前、靖国神社に掲載され感銘を受けた大江一二三陸軍少佐の詠まれた歌をここに記す。

靖國の宮に御霊は鎮まるも
をりをりかえれ母の夢路に

以上

本文書に記載した内容はあくまでも個人の意見・感想であることを明記する。

また、遺骨収集派遣初心者の方自身に対して適時適切なアドバイスや助力をしていた竹中・正木・佐々木・土田の各氏にこの誌上をお借りして厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

- 1) 仲田進一：銅及び銅合金の変色について、防衛技術 vol.8, no.7, pp.291-297,
- 2) https://www.city.sapporo.jp/ncms/shimin/heiba/tenji/guntai_07/index.html：札幌市平和バーチャル資料館HP

事務局からの報告等

一 令和3年度臨時理事会の開催

10月27日(水)、当協議会会議室において臨時理事会を開催しました。事務局から提出された議案等について熱心な討議が行われ、事務局案はそれぞれ原案どおり承認されました。

(一) 議案等

- 第1号議案…令和3年度上半期職務執行状況(報告)
- 第2号議案…令和3年度上半期予算執行状況(報告)
- 第3号議案…令和3年度上半期財産運用(報告)

(二) 出席者

理事11名中10名、監事2名中1名
二 慰霊祭等への参加状況

- ①10月18日、靖國神社秋季例大祭に山下理事長が参加しました。
- ②10月18日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において行われた秋季慰霊祭に、山下理事長が参加しました。

三 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

今年度第2回派遣(10月3日～10月19日)に、水交会から1名が参加されました。

今年度第3回派遣(11月23日～12月9日)は、つばさ会から1名が参加されました。

第4回派遣(1月25日～2月10日)

は、つばさ会から1名の参加を予定しています。

四 新入会員紹介 (敬称略)

(令和3年9月1日～11月30日)

【賛助会員】

山下 邦裕 島崎 勝一

賛助会員2名

掲載内容についてのお知らせ

掲載を予定していた松元直歳氏の「あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰する(第七回)」は、止むを得ない事情により次号に延期させていただきます。心待ちにされていた読者の皆様からのお詫び申し上げます。

寄付金の税額控除に係る領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されており、

従来、5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付していましたが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12月以降随時発送中ですが、該当される方で未だお手元に届いていない方がおられましたら、お申し出いただきますようお願い申し上げます。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、ご遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、有志会員の皆様から寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ちしております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)

年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)

*振込先口座番号(郵便振替口座)

〇〇一四〇・六・二三三四九三〇

(当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会のしおり」をお届けいたします。)

謹賀新年

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長

島村 宜伸

理事長

山下 輝男

専務理事

伊藤 隆

事務局長

國澤 輝生

軍学堂

医療法人社団 伍光会

特定非営利法人 孫子経営塾

同台経済懇話会

株式会社 リエイト

株式会社 SNA

株式会社

キャリアコンサルティング

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

MPD法人

日本サイパンFRIENDSHIP協会